

断章 8 食卓(2)

川鍋 さく

梅雨が始まり、雨の日が七日続いている。昨日はざーざーと川が流れているような雨音を、今日はぴちやぴちやと滴る雨音を聴きながら目を覚ました。雨の音を聴いていると、いろんなことが許されるような感覚になる。心や身に纏わりついた不安や不満、焦りや自己嫌悪や不快感が、洗い流されるような感覚。耳に入ってくる雨の音に意識を向け始めると、「そろそろ起きなきや」「動かなきや」「何かしきや」……そんな言葉を何百個もぶら下げるながら回転している思考の速度が徐々に落ちていき、その遠心力による負荷が軽くなっていく。やがてそっと思考の回転が止まると、自分の呼吸がとても浅く不規則になつていてことに気付く。その瞬間、「少なくとも今この時は、ただゆつくり呼吸ができれば、それでいいや」と思える。だから雨は好き。ただ、高い湿度でべたつくような暑さと、いつにも増して髪の毛がいうことを聞かなくなるのがどうにも嫌だ。

今日は母も仕事がないようで、食卓でせんべいを齧りながら、録画していた『大改造!!劇的ビフォーアフター』をのんびり観ている。でも途中で座つたまま居眠りをしてしまい、番組が終わってテレビの画面が録画リスト一覧に戻った頃に目を覚まし、もう一度はじめから再生する。そして見覚えのあるところを早送りして、「この辺で寝ちゃつたんだよな」というところで早送りを止めて視聴を再開する。ところが、十分、十五分程するとまたうつらうつらと舟を漕ぎはじめ、再び目を覚ました頃には、テレビの画面は録画一覧に戻っている。三周目か四周目で、やっと番組を最後まで観切ることができる。母の予定のない休日の過ごし方は、だいたいこんな感じだ。わたしが居眠りしている母に声を掛けて起こす時もあるけれど、それでも結局また居眠りしてしまうので、母の眠気が自然に覚めるまでそつとしておくことが多い。今日は番組再生を三周したところで、「あー、ダメだ。絶対同じところで寝ちゃう。ちょっと一回横になろう。」と言つて、ベッドに入つていった。すぐに小さな寝息が聞こえはじめ、少しそうとしつかりとした鼾が聞こえてきた。母は昔から鼾をかきやすい。ここ何年かは、寝ている最中、何秒か呼吸が止まっているようなことが時々あるので、睡眠時無呼吸症候群ではと心配になる。たまに夜中、母の鼾や寝息が聞こえずやけに静かだなと思うと、こっそり母の枕元に行つて、ちゃんと息をしているか確認したりしている。本人にも何度もそのことを話し、「それやばいかも!」と何となくの危機感は持つているものの、それも今や日常の一部として慣れた状況になつてしまつていて。四十分程して、母がむくりと起き上がり「あー、寝たわ!すつきりした!」と言つた。

ながら食卓に戻つて來た。わたしがキッチンのお菓子の引き出しを開けながら「紅茶淹れたら飲む?」と聞くと、母は「飲む飲むー!」と楽しきな声で答えた。母のいつものテンションに少し安心しながら、わたしはケトルのスイッチを入れ、ティーバッグを二つ取り出した。紅茶を淹れ終え、わたしにとつてはおやつ兼朝ごはんのチョコレートとビスケット菓子を出し、母と一緒に『ビフォーアフター』を最初から観直した。私はこの番組が特別好きはないけれど、母とふたりで過ごすこの休日の時間がとても心地良かつた。

夜、お風呂上りの母が、また「ごめん、ちょっと背中さすつてくんない?」と頼んできた。わたしはその依頼には快諾しつつも、怪訝な表情になるのを抑えられなかつた。母がそれを言うのは、今週中でこれが三回目だつたから。いくら何でも頻度が多い。母がわたしに自分からマッサージ等を頼んでくるのは、よほど凝りや疲れがしない時だ。癖になつて必要以上に私に甘えてくるような人ではない。だから、こんなに頻繁に私に頼む程背中や腰が痛くなるのは、ただ疲れが溜まつてているというわけではなく、何か異常事態だと思つた。マッサージをしながら、わたしは少し強めの口調で「明日仕事なかつたら、病院行つた方がいいよ。ちょっと痛くなる頻度がおかしいもん。」と母に言つた。母は「はあ、病院か。そうだなあ。」と、渋々という感じで答えた。母は昔から病院に行くのを嫌がる。その理由は、お金が掛かるから。決してゆとりのある収入ではないから、普段から「何かあつた時のためのお金」は確保できていない。そして母は、風邪をひいたり体調が大きく崩れることがほとんどない。少しちゃらが悪くなることがあつても、たいてい一日寝て休めば回復し、病院に行かずに済むことがほとんどだつた。だから、自分はなるべく病院に行かずお金を掛けずに済ませたいと思っている。もうひとつ。病院に行つて、万が一大きな病気が見つかつたら嫌だという考えを母は持つてゐる。過去に会社で健康診断を受けるよう指示があつたときも、費用は会社負担だから掛からないのに、かなり渋々行つてゐた。実は近頃のこの背中や腰の痛みについても、私が病院に行くよう勧めるのはこれが二回目なのだ。さすがに今回は母も自分の体に異常を感じているようで、「明日休みだつたらとりあえず整形外科に行つてみるか。」と言つた。

母の背中の痛みが落ち着いて就寝し、私もシャワーを浴びて寝支度をし、ベッドに入つた。けれどもどうにも心が落ち着かず、タブレットを開いた。普段元気でめつたに体調を崩さない母の、今までとは様子の違う不調に、不安を感じずにはいられなかつた。とくに母は他人よりも痛みに強いらしく、十五年ほど前に腹膜炎になつた時も悪化するまで痛みを我慢できてしまつてゐた、という事がある。そんな母が「痛い」と口にするのだから、よほどの事なのではないか。何か命に関わる深刻な病気だつたらどうしよう……。わたしはタブレットで「背中や腰が痛い 原因」と検索しようと

思いワードを入力した。けれども、今の自分がむやみにネットの情報を漁つても、精神的によくない影響を受けるだけだと思い、入力したワードを消してタブレットを閉じた。素人の自分があれこれ不確定な情報を集めるより、早ければ明日には病院に行って何らかの結果が分かるのだから。わたしはベッドの中で仰向けに姿勢を正し、両手を組んだ。そして瞼を閉じ、一度深呼吸をして、頭の中で言葉を唱えた。

「神様、仏様、おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖の皆様。他にも守護してくれている全ての皆さん。いつも見守り、応援ありがとうございます。母の不調の原因が、命に関わるような深刻な病気などではなく、なるべくすぐに治るものでありますように。これからも、私の大切な愛する存在をお守りください。私からも、私の大切な愛する全ての存在に、愛の加護を。」

物心ついた頃から、夜寝る前に、ほとんど毎回しているお祈り。家族もわたし自身も、特定の宗教を信仰しているわけではなかつたけれど、何がきっかけだったのか、私は寝る前にお祈りをするという習慣が身についていた。恥ずかしいので、他の誰かにこの事を明かしたことはない。母にだけ、一度か二度、話題の流れで言つたことがあるだけだ。根拠はないけれど、目に見えないものの力とうのは確実に存在していると思っていて、自分の祈りも、微力ながら何かを守る力の一部として影響力を持つはずだと信じてきた。だからこどもの頃から、寝落ちするほど疲れているとか体調が悪い時を除いて、ほとんど毎晩、自己流ながらお祈りをしている。とくに不安な事や強い恐れの感情がある時は、祈りの内容をより具体的にして何度も繰り返し唱えた。この日も、眠くなるまで繰り返し唱えた。